

近代日本における 民間アジア研究成立過程に関する一考察

野崎賢也

はじめに

近代日本におけるアジア研究は多様な側面から成り立っていたが、ここでは、その中でも民間でのアジア研究の進展過程について言及する。特に、「農本主義者」のアジア観・アジア研究について触れてみたいと思う。本稿で取り扱う際に中心となる時代は、明治末期から昭和初期にかけてである。最初に注意しておく必要があるのは、「アジア主義」「農本主義」両者とも、「それ自体としてほとんどファシズムとは関わりがないにもかかわらず、それが日本ファシズム思想の共通の特製とみられ」てきたという橋川文三の指摘である^①。

このため、まず始めに「アジア」に関する用語の整理を行っておかなければならない。平石直昭は、「アジア主義」もしくは「大アジア主義」を、「日本近代史上に隠顕する一つの思想的傾向、すなわち西洋列強の抑圧に抗して、日本を盟主にアジアの結集を訴えたそれを指すもの」と定義する^②。「アジア主義」という言葉が、侵略主義・膨張主義と殆ど同義に限定的に用いられる場合も多いけれども、ここでの平石の定義は、非常に広い範囲を指すものとして考えられている。例えば、竹内好による「アジア主義」研究においては、「日本における近代ナショナリズムの成長と不可分の動きとして「膨張主義」を捉え、後者の一結実として「アジア主義」を解している」^③。このように、「アジア主義」の定義を確定することは難しいのであるが、ここでは前記の平石の定義、つまり広義の「アジア主義」を用いることとして稿を進めたい。

同様に、「農本主義」の定義であるが、ここにも大きな問題が存在した。「農本主義」という言葉は、丸山真男以来一般に「日本ファシズム」と不可分の関係にあるものとして

^①橋川著/筒井清忠編『昭和ナショナリズムの諸相』名古屋大学出版会 1994、p119

^②平石直昭「近代日本の「アジア主義」-明治期の諸理念を中心に-」『アジアから考える5近代化像』溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史 編 東京大学出版会 1994

^③平石（同上）によるまとめである。

捉えられている。けれども、ここでは「農本主義」に関しても広義に解釈し、農民運動の一端に現れる意識のような幅広いものとして考えたい。そうした幅広い「農本主義」の中で、今回中心的に取り上げるのは権藤成卿を中心にした思想・運動である。

以上のように「アジア主義」と「農本主義」に関して簡単に整理したが、本稿の目的は、近代日本の「アジア主義」において、アジアへの視線がどのように形成されてきたか、特に一部の「農本主義」に見られる「アジア主義」的要素との接点を明らかにすることである。

1 「農本主義」と「アジア主義」

本稿で考察の対象とする近代日本の「農本主義」と「アジア主義」との繋がりには、微妙な間隔が存在している。例えば、「農本主義」は、天皇と神道に連なった国粹的なイデオロギーとして認識されているのが一般的である。それは、地方あるいは郷土、そして古代への回帰的なベクトル、および天皇への求心的なベクトルを持ったイデオロギーであり運動であったことは否定できない。

けれども、他方で「農本主義」は「アジア主義」との併行が語られることも多かったのである。実際、近代日本の「農本主義」の内部には、国粹的日本的ベクトルと同時に「アジア主義」的なベクトルが常に併存していたといってもよいだろう。

この点に関して表面的な理由として考えられるのは、戦前の民間右翼の活動、特に黒龍会と「農本主義者」の関わりを挙げておかなければならない。黒龍会のメンバーであった権藤成卿が「農本主義」運動の中で重要な役割を果たしていることから、「農本主義」を「アジア主義」と直結させている見解も数多く見られる。

本稿では、こうした「農本主義」と「アジア主義」の錯綜した関係を整理し、捉え直すことを試みる。

2 「農本主義者」権藤成卿

ここでは、「農本主義」と「アジア主義」の関係を明らかにするためのキーになる人物として、権藤成卿に関しての伝記的事実を簡単にまとめておこう。権藤成卿に関する研究は、橘孝三郎などのような他の「農本主義者」に比べると格段に少ない。伝記的研究の唯一の例外としてあるのは、滝沢誠のものであり、権藤の思想に関する議論としては滝沢と網沢満昭のものが代表的である⁽⁴⁾。ここでは、上記の研究の成果に全面的に依拠して権藤

成卿の生涯を追っていきたい。

権藤成卿は、一八六八年（明治元年）久留米藩の藩医の家に生まれる。しかし、権藤の父は、維新後医者を廃業し一町ほど農地を買って地主となり、隠居することになる。父は、農産物の新種を導入して周囲に普及させたりしており、周囲の農家ともかなり交流があったようである。権藤は父より漢学の教育を受け、東京に出て二松学舎に進むが、授業中、漢文の解釈をめぐる教授と対立し退学している。その後、郷里に帰って漢籍の読書に励んでいた。そして、明治三四年ごろから、弟（当時電通副社長）を介して黒竜会のメンバーと関係を持つようになっている。黒竜会が中国人向けに発行する漢文雑誌『東亜月報』の編集・主筆を行い、内田良平などの代筆を行っていた。この頃、日本に来ていた中国人留学生や革命家と親交を深めている。当時対立的関係にあった中国革命同盟会・公洋学派のそれぞれと親しかった。その後、日韓合邦運動が、日韓併合によって挫折して以後は、黒竜会との関係も薄れている。そして、老荘会の講演に呼ばれ、大川周名、満川亀太郎、下中弥三朗（平凡社社主）などと知り合っている。この頃まで、権藤は表だった活動はほとんど行っていない、僅かにその漢学の知識が認められているだけであった。

その後、大正九年に自ら中心となって「自治学会」を作り、様々な思想家・活動家と関係を持つようになる。そして、著書『皇民自治本義』を大正天皇に献上し、また、大正十一年『南淵書』を献上する。『南淵書』は、大化改新の思想的指導者（中大兄皇子のブレン）といわれる南淵請安の著書であり、権藤家に伝わったものを権藤成卿が校訂し、「日本最古の書」として表に出したものだと言われていた。この件については、当時真偽論争が大きな問題となっており、結局その『南淵書』は本物ではないとされている。今日では、『南淵書』は、権藤が仮託の方法を採ったものだと考えられている。仮託とは、自らの思想を公にするのが困難な状況において、歴史上の有名人物の姿を借りて自らのものを語るという中国的な方法であり、当時、権藤と関係があった康有為が中国で仮託の方法によって大きな反響を巻き起こしていたのを参考にしたのだと考えられるようになった。こ

⁴⁾権藤成卿の正確な研究自体ほとんど無いが、伝記的な研究としては、滝沢誠「権藤成卿覚え書」私家版 1968、同「権藤成卿」紀伊国屋書店1971、が有るのみである。思想の研究としては、同じく滝沢「近代日本右派社会思想研究」創論社 1980、あるいは綱沢満昭「農本主義と天皇制」イザラ書房 1974、が代表的である。権藤に多少言及したものは、芳賀登「日本の農本主義」教育出版センター 1982、小林英夫「日本ファシストの群像」校倉書房 1984、などがあるが、その思想の内容は全く正確に理解されておらず、イメージが先行した研究の代表例だといえる。

のように、権藤は、西洋的な正式教育を受けた当時の知識人とは、教養の基盤がかなり異なっていることが分かる。権藤成卿は、いわば近世の儒者のような民間知識人であった。権藤の東京の自宅の別棟は、通称「権藤の空家」として右から左までの多くの活動家のたまり場となり、権藤は著述活動を続けながら、そうした青年活動家達とも交流を持った。当時既に初老の域であった権藤は「翁」として、実践面よりもその思想が重んじられていた。権藤の活動家との交流は、その思想の性格からして広い範囲にわたり、右翼だけではなく農民運動家やアナキストとも深い関係にあった。例えば、幸徳秋水とも交わり、大杉栄とは権藤の妹（婦人解放運動家）を介して親しかった。権藤は、大杉栄虐殺事件のために内田良平と交わりを断っている（内田が、事件を肯定したためだと言われている）。

そして、井上日召や橘孝三郎も出入りするようになり、その後、彼らが血盟団事件や五・一五事件に関わることになる。そうした非合法的な活動に関わる以外に、権藤は合法的な農民運動とも関わりを持っている。昭和六年、権藤が思想的中心となって日本村治派同盟を結成する。メンバーは、犬田卯（農民文学、農民自治文化連盟）、橘、長野朗（農民新聞）、武者小路実篤（新しき村）、下中、大川周明、土田杏村などであり、参加メンバーを見れば、左右の農民運動が混在した当時の状態が判るだろう。翌昭和七年、日本村治派同盟は権藤の思想をより表面に出した農本連盟となる。そしてすぐに、農本連盟は、行動派と理論派に分裂し、橘などが中心となって行動派の自治農民協議会ができる。その綱領は、大地主を認めず、作付け義務、負債の整理、飯米差し押さえの停止などであり、これは農村救済請願運動として議会に働きかけられた。その結果、かなり譲歩することになったが、いちおう議会で農民食料差押禁止法案が可決されることになった。その後、血盟団事件、五・一五事件が起こり、それらの事件の「黒幕」が権藤だと報道されることによって、権藤の名が初めて広く世間に知られるようになった。実際、もしクーデターが成功すれば、計画では権藤が政治顧問として政権に入る予定であった。しかし権藤は、事件とは全く無関係であり、例えば、橘などに対して直接行動を戒めた言動が記録されている。

その後は、政治活動らしきものはほとんど行っていない。そして、日中戦争開戦前、中国国民政府が権藤を招いているが、健康状態が良くなかったため断っている。そして、昭和十二年、中国へ渡ることなく死ぬ。

このように、権藤成卿は、民間にいて、さまざまな活動家と関わりを持ち、その思想は、官僚・軍人や農民運動家などに広い範囲にわたって影響を与えている。影響を受けた人物は、政治事件に関わってはいるが、権藤の思想そのものが青年活動家の行動の起点になっ

たわけではなく、逆に、彼らに「理想」を与えたのだといえるだろう（この点、北一輝が持った影響とは異なっている）。およそ権藤の思想は、「民衆的」に素朴な側面＝原始共産制への志向を持っていたため、農民運動家や農村出身の軍人など多くの人間に支持され、受け入れられたといえるだろう。

3 権藤成卿における「アジア主義」「農本主義」

権藤の思想は、当時の一般的知識人・西洋的教養を持った人間にとっては、「独特な一種得体の知れない雰囲気につつまれた」ものであった⁽⁵⁾。権藤の著作は漢学の豊富な素養に裏付けられた難解な文章であり、権藤に傾倒した青年活動家や軍人などにとっても「難しくてよく判らない」ようなものであった。また、仮託などの方法は、当時の一般的知識人には理解できるはずがなく、その点に対する「正統知識人」の違和感は「農本主義」論に大きな影響を与えているといえるだろう。権藤の思想は、「国家主義」でも「軍国主義」でもない、「社稷」（土地の神と穀物神）を中心とした徹底した「農本主義」＝唯農論でも云うものである。それは、ウルトラ「国家主義」と言うことはできない。「国家」を超えた「社稷」の自治、つまり「国家機構」「国家権力」否定の思想と考えなければならないのである。もしも「超国家主義」という形容を用いるならば、「超国家-主義」（あるいは「無国家」）と解釈すべきである。ここからもわかるように、権藤の思想には、老荘的アナキズム（無政府主義）的要素が濃い。そして、権藤の説く思想は、農業や男女の関係など、人間の生活の根本を重視した唯物的なものだといえる。橋川文三は、権藤の思想を大杉栄と同様な「絶対的個人主義」と呼んで⁽⁶⁾。

権藤にとって、「国家は『社稷』が便宜上つくりあげた相対的存在であって、決して絶対的なものではなかった」⁽⁷⁾。「社稷」を重んじないものは、国家と同様に君主＝天皇さえも否定され、「放伐」されなければならないものであった。この点は、既に当時の右翼から「忠孝道徳を蔑如する無慚放逸のアナキズム」「不忠反逆思想」だと批判されている⁽⁸⁾。あるいは、権藤と直接接していた血盟団事件の小沼正は、権藤の思想を「大陸的な横

⁽⁵⁾同上 p.3

⁽⁶⁾橋川：前掲書、第1章参照。

⁽⁷⁾前掲；綱沢『農本主義と天皇制』 p.15

⁽⁸⁾蓑田胸喜「君民共治論の著者を誅す」『原理日本』昭和八年三月号（滝沢『近代日本右派社会思

の思想」「横の協調、協和主義」であると言ひ、権藤の思想に違和感を抱いていたことを表明している⁹⁾。

そして、権藤は、明治の近代行政制度を「官治」式として批判し、「自治」が疎外されている原因を明治国家体制に求めた。権藤は、国家機構を「作為」と考え、「無為自然」の「自然而治」こそ理想であると考えていた。それは、民の上にはなんらの「為政者」もおらず、ただ一人の非政治的「君」だけがいるという、水平的な志向である。

権藤の思想の根本にあるのは、「生存（生活）」であり、衣食住と男女の性慾という民の生活基盤の安定こそが最重要なのであった。

「民人の純生なる要求は、即ち安全なる生存の要求である。其安全なる生存の要求は、衣食住の安泰と、男女慾の調和とを、現在以上に進めたとき、各人各個の同一なる意欲にして、その意欲を充足させるが為に、心と形との両面の勤勞に服し、…自然の化育を助け進むるのである。」（『自治民政理』）

「又た一派曲学の徒ありて、かかる政容の意嚮を迎へ、修身書倫理学などの名義を借り怪しげなる国体論を鼓吹するものもあるが。国体とは本来何のことで有る、人の必要は衣食住と男女の性慾ではないか、衣食住と男女の性慾を離れて人はない、人を離れて郷団はない。郷団を離れて国はない。…況んや為政者の都合を割出しに、国民を去勢する方法を以て徳育と名づくと云ふが如きは、咄々怪事である。」（『自治民範』）

「何と云っても人間は生きると云ふ事、原始哲学とでも是を言ひませうか、兎に角生きると云ふ中心点をキチンと把握するところに人生一切の難問題の解決は可能だと信じます。」（『君民共治論』）

こうした民衆の生活に密着した即物的な感覚、全てを「人間の自然」に還元した視点こそが、その文体や概念の難解さにもかかわらず、多くの農村青年や農村出身の軍人を捉えていったのだといえよう。橋川文三が言うように、権藤の思想は、普遍的・根源的な「国家を超えた人間のヴィジョン」を示しているからこそ¹⁰⁾、農民（民衆）に訴えかける力を持つ

想研究』所収資料 p.45)

⁹⁾前掲；滝沢「近代日本右派社会思想研究」p.48

たのである。一方、この人間の生活の必要からの「唯農論」的な思想は、「産土の神」信仰を経由して、農耕儀礼の長としての天皇へと結びつけられることになった。橘孝三郎はその典型である。

幼い頃から漢籍を読み、後には中国の革命家達と関わり、中国語での新聞発行に携わっていたことから分かるように、権藤は、その農本思想の中に不可分にアジア的要素を含んでいたのであった。そのアジア的要素とは、例えば平石が追求したような外部の影響、特に欧米への対抗の手段としてのナショナリズムに影響された「アジア主義」とは異なっている。また、権藤の思想は、黒龍会の「膨張主義」あるいは「大アジア主義」とも異なっている。こうした思想のため、日本の「農本主義」に権藤が与えた影響は、単純に判断できるものではなかった。

日本の「農本主義」の中心＝天皇へと向かう回帰的求心的なベクトルを、権藤のアジア的要素が一種曖昧にしてしまうところがあった。あるいは、逆に言えば、「農本主義」が持つ「汎アジア」的要素（農耕を中心とした民衆の営み）が、現実の運動の中心となった「農本主義者」達によって日本的に変色させられたと考えるのもいいのではないだろうか。ここでは、「農本主義」と「アジア」との接点に触れただけであるが、今後、権藤の思想と民衆的な「農本主義」意識に通底したこの「アジア的」要素に関して、深く掘り下げていく必要があるだろう。

おわりに

この小論では、近代日本の「農本主義」に大きな影響を与えた権藤成卿と「アジア」との接点に照明をあてることを試みた。天皇へと向かう求心的回帰的な側面ばかりが強調されてきた近代の「農本主義」だが、権藤の思想が体现していたような「アジア」へ向かうベクトルも同時に存在していたのである。「農本主義」におけるこのベクトルの錯綜を追求することは、近代の日本において「農本主義」が広範な民衆を巻き込んだ運動となった理由を解明していく際に重要な役割を果たすのではないだろうか。

⁽¹⁰⁾ 橋川；前掲書、p.47

